

プレFD受講生の学習者特性に着目した 研究・教育・社会貢献の統合の特徴[†]

大山牧子*¹・根岸千悠*¹・佐藤浩章*¹

大阪大学全学教育推進機構*¹

本研究の目的は、プレFDにおいて学者の役割である研究・教育・社会貢献を統合的に捉えるための実践について、受講生が考える統合の特徴を明らかにすることである。具体的には、受講生が作成した統合のベン図ワークシートについて、学習者特性（所属課程・社会人経験の有無）に着目して、記述内容の特徴を比較分析した。また、3つの領域を統合する意義について受講生の認識を調査した。その結果、博士課程の学生はより統合的に大学教員像のイメージを持つこと、社会人経験のある学生は社会貢献が含まれる領域でより具体的な活動をイメージすることが確認された。本実践は3つの領域を統合するイメージづくりの支援となった可能性が示唆された。

キーワード：プレFD，大学院教育，キャリア教育，ベン図

1. はじめに

近年、将来大学教員を目指す大学院生向けの教育に関するプログラム(Preparing Future Faculty: 以下プレFD)のニーズが高まってきている。学生のキャリアパスに対する不安の脱却と大学院が今後社会の需要に応じていく観点から、博士後期課程のプレFD実施の努力義務化が2019年の大学院設置基準の改正でも示されている(文部科学省 2019)。このような状況の中、わが国の大学では、授業設計や授業技術(田口ほか 2013)、また実践実習(根岸 2018)など、教育力向上を目的としたプレFDプログラムが研究大学を中心に開発されてきている。

大学教員の主な仕事は、研究・教育・社会貢献であるが、BOYER(1990)は、大学教員にとってのそれらの使命は、研究者(researcher)としてではなく、学者(scholar)として捉えるべきだとした。そして、そのための枠組みを「発見(discovery)(=自分分野での研究)」

「統合(integration)(=分野を超えた研究)」「応用(application)(=実社会との連携)」「教育(teaching)(=後継者の育成)」と4つの学識として示した。大学教員はこれらの学識を統合的に捉える存在になるために、院生の間に見据えることが重要であると指摘される(吉田・栗田 2015)。4つの学識のうち、大学院生は発見(研究)について自分自身の研究課題に取り組むことで理解を深めており、教育はプレFDプログラムの受講を通して深めることが可能になってきた。ただし、分野を超えた研究である統合の学際性や、社会とのつながりである社会貢献に関わる応用の学識は、院生にとってイメージすることが困難である。さらにはすべての仕事を統合して、どのような学者になるのかをイメージすることも難しいと考えられる。ゆえに多様な背景を持つ大学院生が3つの領域を統合するためのイメージづくりの支援を検討することが有用であると考えられる。そこで、大阪大学「未来の大学教員養成プログラム」では「大学授業開発論Ⅲ」(2単位)において受講生が、研究・教育・社会貢献という3つの領域の意義について学ぶと同時に、それらの抱負を作成した上で、統合を言語化することを通して、大学教員としての学識について考えるプログラムを開発した。

本研究の目的は、プレFDを受講する大学院生が、学者の役割である研究・教育・社会貢献を統合的に捉えるための実践について、受講生が考える統合の特徴

2021年4月12日受理

[†] Makiko OYAMA*¹, Chiharu NEGISHI*¹ and Hiroaki SATO*¹: Characteristics of the Integration of Research, Education, and Social Contribution Focusing on the Learner Characteristics in Preparing Future Faculty Program

*¹ Center for Education in Liberal Arts and Sciences, Osaka University 1-16 Machikaneyama-cho, Toyonaka City, Osaka, 560-0043 Japan

を明らかにすることである。具体的には、3つの領域を統合するためのベン図ワークシートの記述について、所属課程と社会人経験の有無に着目した学習者特性で記述内容の特徴を比較分析する。また、3つの領域を統合する意義について受講生の認識を調査する。

2. 実践の概要

2.1. 大学授業開発論Ⅲ

大阪大学では「未来の大学教員養成プログラム」を、全大学院生向けに2014年度より開催している。本プログラムは、複数の選択科目、ならびに3つの必修科目「大学授業開発論Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ（以後FFPⅠ・Ⅱ・Ⅲ）」から構成される。必修科目は、それぞれ大学の教授学習に関する知識や実践を学ぶことを目的としている。

本研究の対象であるFFPⅢ（大山・佐藤 2018）は、2017年2月22日～24日の集中講義の形式で実施された。授業内容は①SoTL（Scholarship of Teaching and Learning）に基づく教育実践研究の計画、②教育の抱負作成、③研究の抱負作成、④社会貢献の抱負作成、⑤研究・教育・社会貢献の統合の試みという5つの内容で構成される。

2.2. 研究・教育・社会貢献の統合のためのワーク

本研究が対象とする⑤研究・教育・社会貢献の統合の試みについて、3日間の授業のうち、最初の2日間で3つの領域の信念や想定される活動を言語化する個人ワークとグループ学習を繰り返す。これらのワークを通して、各800～1000字で研究、教育、社会貢献の抱負を作成する。最終日には3つの領域の統合を検討するために、概念同士の比較や分類、共通点を見出すことに長けている思考ツールであるベン図（黒上 2017）を用いて図1の「統合のベン図ワークシート」を作成する。具体的にはA：研究・教育・社会貢献、B：研究・社会貢献、C：研究・教育、D：社会貢献・教育の統合に関する記述欄を設けて、それぞれの重なり

りを検討するようにした。作成した3つの抱負の内容に基づいて、自分自身が持つ信念や具体的な活動に言及しながらワークシートを埋めるように指示した。このワークは約2時間で個人ワークとグループ学習を繰り返しながら各領域が重なる部分を熟考して、統合のベン図を作成する課題であった。最後に発表と質疑応答を実施した。

3. 方法

3.1. 調査対象

FFPⅢの受講生15名（a～o）の統合のベン図の成果物を対象とする。受講生の所属課程ならびに研究科内訳を表1に示す。なお、社会人経験者は修士課程で4名、博士課程で4名である。社会人経験者の職業は、看護師、キャリアカウンセラー、高校教員、日本語教員といった、実践を伴う業種である。

3.2. 分析方法

(1)ベン図ワークシートの記述内容ABCDについて、学習者特性として所属課程・社会人経験の有無に着目して分析する。具体的にはまず、記述内容を第一著者が意味のある文節に区切ってキーワードを抽出する。次に関連するキーワードに分類して特徴を抽出し、その後他の著者と共にキーワードと特徴が合致しているかどうかを繰り返し検討する。

(2)授業終了後にWeb上で実施した匿名での事後アンケートを集計する。アンケートの内容は【学習到達度の確認・各ユニットの理解の確認】という項目であり、それぞれ5件法における選択と自由記述で回答を求めた。各領域を統合する課題に対する受講生の認識を分析するために、「教育・研究・社会貢献の抱負、ベン図を作成して、気づいたことは何ですか？」の質問の自由記述回答を回答全体で(1)と同様の手順で筆者らが帰納的に整理してカテゴリ化した。

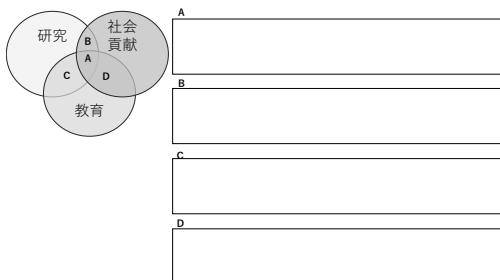


図1 統合のベン図ワークシート

表1 受講生の所属課程および研究科内訳

| 所属課程 | 人数 | 研究科内訳 |
|------|----|---|
| 修士課程 | 7 | 文学 (2) 人間科学 (3) 医学系【看護】 (2) |
| 博士課程 | 8 | 経済学 (1) 理学 (1) 基礎工学 (1) 医学系【医学】 (1) 医学系【看護】 (1) 言語文化 (3) |

4. 結果と考察

4.1. 授業の実際

本課題は、全員の成果物が高い評価であったとともに、授業としても全員が修了している。事後アンケートの、学習到達度の確認である「この授業を通して身に付けるべきものとして期待された学習成果が得られた」という質問には、5件法で平均4.67 ($SD=0.47$) という結果から、学生の実感としても理解が得られていたことが確認できた。

4.2. 所属課程による統合の特徴

表2に所属課程と社会人経験の有無による統合の特徴を示す。以下、実際の記述内容の引用は斜体で示す。

A：研究・教育・社会貢献の統合については、所属課程（I IIが修士課程、III IVが博士課程）で異なる特徴が見られた。修士課程の受講生は、IとIIで働きかける対象が異なるものの、どちらもその対象は明確で、「研究能力を備えた看護師の育成（I：学生j）（以降学生は省略）」や「高校生大学生への消費者教育（II：c）」といった、後継者像を含んだ教育に焦点を絞った記述が見られた（6件）。一方、博士課程の受講生は「看護の価値を高める（III：k）」や「社会各層の人へ～中略～知識の発信（IV：f）」という学問分野の発展や社会につながる記述が見られた（7件）。修士課程の学生は、3つの領域の統合が教育寄りにイメージされているが、博士課程の学生は教育だけではなく、研究や社会における位置づけをより統合的にイメージしていることが確認された。

この結果から、大学教員の3つの領域の統合イメージが所属課程で異なることを踏まえて、受講生の学年に応じて支援のあり方を考慮する必要があることが示唆された。例えば、修士課程の学生に対して、より統

合されたイメージを促すためには、特に研究や社会における位置づけについてこれまでの博士課程の学生の記述データを整理して、それぞれ事例として授業時に示すことが有効であると考えられる。

4.3. 社会人経験の有無による統合の特徴

社会人経験の有無（I IIIが社会人経験あり、II IVは社会人経験なし）でそれぞれ特徴が見られた。BやDの社会貢献を含む領域においては、I IIIが対象や活動で具体的な行動を示しており（18件）、例えば「企業におけるコンサルティング（I：d）」や「疫学的エビデンスを基にした～中略～市民講座（III：h）」という記述から確認できる。一方、II IVでは「警察との連携（II：c）」や「アウトリーチ活動（IV：g）」のように、漠然と学問分野の社会的な意義の高まりを期待する内容が特徴としてみられた（7件）。これは、社会人経験の有無によって社会貢献のイメージの具体性に違いがあることが要因であると推察される。また、I IIIは社会貢献の活動において、大学から社会への活動だけでなく、社会から大学への接続についても意識的であることが「地域看護ボランティアを実習単位として認定する制度作り（I：j）」や「産学連携教育（I：d）」という記述から確認された（4件）。このことは、社会人経験の有無によって、大学と社会とのつながりの認識に差があることを示すと考えられる。Cについては、どちらも後継者の育成が挙げられているが、II IVは「発表や国際論文文化の支援（IV：g）」や「既存の観点に捉われない洞察力と独自の答えを導く研究力を兼ね備えた経済学者の育成（IV：f）」のように研究者育成に焦点化している（4件）のに対して、I IIIは「実践できる人材の育成（I：i）」といった実践者の育成が想定される記述（3件）が示された。

このことから、授業の中で社会人経験のある学生と

表2 所属課程と社会人経験の有無による統合の特徴

| | A: 研究・教育・社会貢献 | | B: 研究・社会貢献 | | C: 研究・教育 | | D: 社会貢献・教育 | | |
|------|------------------|-------------------------|--|-----------|---|--------------------|---|-----------------------|--------------------------------------|
| | 特徴 | キーワード事例 | 特徴 | キーワード | 特徴 | キーワード | 特徴 | キーワード | |
| 修士課程 | I 社会人経験あり (4名) | 働きかける対象が明確 教育支援に焦点化 | 看護師、不登校の生徒や薬物依存者 育成、開発教育、支援 | 対象の活動が明確 | 公開講座・コンサルティング・政府提言 | 研究知見の教育応用 人材育成 | 教育方法開発・改善、就職活動のカウンセリング 実践できる人材の育成、キャリア教育 | 対象の活動が明確 社会から大学の活動 | 高大接続、健康教室、産学連携、市民講座、ボランティアの単位認定、提携教育 |
| | II 社会人経験なし (3名) | 生徒・学生を対象 | 高校生・大学生への消費者教育、学生中心 | 社会との連携 | 警察との連携、弁護士との連携 | 後継者育成 教育実践研究の実施 | 後継者の育成 教育実践研究 | 高大接続 社会を知ること | 出前授業 勉強会 |
| 博士課程 | III 社会人経験あり (4名) | 学問分野の社会的意義 社会の在り方に言及 | 開かれた看護、看護の価値の向上 健康で豊かな生活の社会、日本のおもてなし力 | 対象の活動が明確 | 市民講座、日本語教育現場 | 育成の在り方 | 研究マインドの醸成、成果を学生への「正しい」伝達、批判的思考や統計的思考 | 対象の活動が明確 社会とのつながり | オープンキャンパス、地域セミナー、ヘルスサイエンスカフェ、公開講座 |
| | IV 社会人経験なし (4名) | 学問の社会への貢献性 | 多様な社会各層へ対象の拡張、産学連携と教育の掛け合わせ | 研究内容の社会応用 | 信頼性の高いエビデンス、健康増進や予防行動への寄与 社会に新しい測定方法を提案、国際経済学に対する基礎認知の促進 | 後継者育成 育成像 | 研究指導、ゼミ指導、研究者の育成 オンリーワンの研究テーマ、既存の観点に捉われない洞察力と独自の答えを導く研究力 | 研究知見の伝達 | アウトリーチ活動、授業映像の提供 |

ない学生同士の交流の機会を導入することで、自分の学問分野の特性を理解し、研究・教育・社会貢献のどの部分の重なりが最もイメージしやすいかを考える機会が提供されると考えられる。今後、実務家教員など様々な背景をもつ人が大学教員を目指す可能性が高まる中で、交流することは有意義であると考えられる。

4.4. 研究・教育・社会貢献を統合する意義

表3に事後アンケート「教育・研究・社会貢献の抱負、ベン図を作成して気づいたことは何ですか？」の記述内容のカテゴリを示す。3つの領域や統合には、大きく可変性と不変性があるという気づきを得ていたことが確認された。詳しく見ると、可変性においては、3つの領域は常に更新されるものであり、考え続ける必要があることや、社会の中において自分の研究領域がどのように在るべきかを捉えるの必要性といった記述が見られた。一方で、不変性においては、自分自身の変わらない信念を持つことの重要性、並びにそれらを言語化することの困難さが示された。

これらの結果から、研究・教育・社会貢献の統合のためのベン図ワークシートの作成課題の実施を通して、3つの領域を統合するイメージづくりの支援ができた可能性が示唆された。しかしながら記述の事例からもわかるように、本課題において、大学院生の段階では3つの領域を統合することの意義や困難さを理解するものの、学者 (scholar) として3つの領域のイメージを明確に持てたわけではない。したがって、教員になってからも3つの領域の統合を継続的に考えることが重要であることを、プレFDで強調して伝える必要があると考えられる。

5. まとめと今後の展望

本研究の目的は、プレFDを受講する大学院生が、研究・教育・社会貢献を統合的に捉えるための実践について、受講生が考える統合の特徴を明らかにしてきた。その結果、学習者特性において所属過程で大学教員像のイメージに具体性が異なること、また社会人経験の有無では社会貢献を含む領域の捉え方の柔軟性が異なることが明らかになった。また本実践は3つの領

域を統合するイメージづくりの支援となったことが確認された。学習者特性ごとに記述の特徴が明らかになったことは、今後多様な背景を持つ受講生に向けてプレFDプログラムを設計する上で示唆的であると考えられる。しかしながら、本研究はベン図の記述の分析にとどまっていることから、大学院生の持つ大学教員像の把握に限界がある。インタビュー等を通して活動を分析する必要がある。

謝 辞

本研究は、科学研究費20K14081によって実施された。

参 考 文 献

- BOYER, E.L. (1990) *Scholarship Reconsidered: Priorities of the Professoriate*. Princeton: The Carnegie Foundation for the Advancement of Teaching. 有本章 (訳) (1996) 大学教授職の使命. 玉川大学出版部, 東京
- 黒上晴夫 (2017) 初等中等教育におけるシンキングツールの活用. *情報の科学と技術*, 67(10) : 521-526
- 文部科学省 (2019) 大学院設置基準の一部改正について (諮問). 中央教育審議会.
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1420274.htm (参照日 2021.03.25)
- 根岸千悠 (2018) 大学教員を目指す大学院生を対象とした相互授業観察プログラムの試行と評価: 授業イメージの変容に着目して. *日本教師教育学会年報*, 27 : 146-156
- 大山牧子, 佐藤浩章 (2018) SoTLに基づいた教育実践研究計画を作成するプレFDプログラムの試行と評価. *日本教育工学会論文誌*, 41(Suppl) : 225-228
- 田口真奈, 出口康夫, 京都大学高等教育研究開発推進センター編著 (2013) 未来の大学教員を育てる—京大文学部・プレFDの挑戦. 勁草書房, 東京
- 吉田壘, 栗田佳代子 (2015) 大学院生版アカデミック・ポートフォリオの開発. *日本教育工学会論文誌*, 39(1) : 1-11

(Received April 12, 2021)

表3 統合の意義のカテゴリ

| 大カテゴリ | 中カテゴリ | 記述の事例 |
|-------|-------|--|
| 可変性 | 更新性 | 考える中で常に変化していることからもっと自分の目指すべきものを常に考え続け整理する必要がある |
| | 社会性 | 自分の研究が果たして誰にどのように役立つだろうかということをも再認識できました |
| 不変性 | 信念構築 | 自分の中の土台の脆弱さ |
| | 顕在化 | 自分の中でぼんやりと思っている、それを文章に起こすのが非常に難しいということ |